

## 封飾の行方

古宮 九時

「そういえばオスカー、あの封飾ってどうしました？」

呪具を探して東の大陸を旅している途中、唐突にそう問われたオスカーは、馬上から妻を振り返った。

薄曇りの空の下、二人が行くのは細い峠道だ。後ろから馬を走らせているティナーシャは、怪訝そうな顔の夫にもう一度言った。

「あれですよ、ファルサス王家の封飾。アカーシアと同じ出所のやつです。私が死んだやつ」

「死んだって。お前は どうして そうぎっくりお構いなしなんだ……？」

どちらかというオスカーにとっては思い出しにくい記憶なのだが、彼女自身はあつけらかんとした態度だ。そこに物申したいわけではないが、聞かれていることは分かる。あの封飾はアカーシアほどではないが危険物で、それをどう采配したのかということだろう。

オスカーは正直に返した。

「壊した。というか壊れた。お前を抑えきるので限界に近かったみたいだな」

「へー、あれに許容量とかあったんですか。面白いですね。アカーシアもそうなのかな」

「試そうとするなよ。俺が破裂するかもしれない。——封飾に残ってた力は壊れた時に、俺に吸いこまれた。アカーシアと元は同じ力だから引き寄せられたんだろうな」

「えっ、そんなことが可能なんですか」

ティナーシャが闇色の目をまるまると見開く。じつとオスカーを見てくる視線は、まるで面白い研究材料を見つけたかのような。彼は嫌な予感に、前を向き直しながら一応言った。

「何だ……。何かするなら先に相談しろ」

「別に貴方を破裂させる気はないです。ただそれなら、もう一振りのアカーシアを取り上げちゃうのもありなのかなって」

「一応国宝なんだが」

「万が一の話ですよ、万が一。ずっと続く国なんてないでしょう？」

「それはそう」

ファルサスが未だ大国として存続しているのは、周囲の環境や運に恵まれているからだ。そしてそれが永遠に続くわけではない。そして国が崩壊した後、特殊な力を持った王剣がどうなるのか……考えれば「回収しよう」というティナーシャの発想も分からなくもない。

「アカーシアはともかく、それができるなら他の呪具も誰かが取りこむ可能性があるのか気になりますね。私たち自身、エルテリアの力を取りこんでるわけでしょう？」

それは事実で、だからこそ二人はこうなってしまうている。ただ、変質後に意図してアカーシアを取りこんだオスカーと違って、ティナーシャは自身の魔法だけで戦っている。歴代最強と謳われた魔法士は、人だった頃のみで十分に強力なのだ。

それは事実だが——オスカーは、自分よりも彼女の方がエルテリアと親和性が高かったことを知っている。彼女はあの球と繋がる当主だったのだ。球と相反するアカーシアの主人だったオスカーよりもずっとあの呪具の力

を継いでいるはずだ。

とは言え、彼女は記憶の呼び出し以外にあの球の力を使おうとしたことはない。それは彼女が明確にあの球のもたらす効果を忌避しているからだろう。

「別の呪具を破壊する時にも注意した方がいい、ということか？」

「それもあります。私たちが支配されるようなことになったら目も当てられませんし」

「壊し損ねたら大惨事になるというのは学習した。これからはそつちも気をつけるか。——あとは？」

「それも、ということとは別の懸案もあるのだろう。」

だがティナーシャは、先ほどと同じ猫を思わせる黒い目で夫を見つめると、不意に愛らしく笑った。

「あとは、必要な時になったら言います」

それきり話は「死んだ時に遺体をどうするか」という気配りのないものに変わっていった。

彼女が語らなかつた真意の意味を、オスカーが知るのはずとずっと先、この長い旅の終わりの時だ。

細い山道は、左右に茂る木々が全ての音を吸い取っていくようだ。そんな中、彼女の声が穏やかに響く。

「オスカー、時を巻き戻せるなら何か望みはありますか？」

「もう叶えた」

夫の答えに、魔女はくすくすと楽しそうに笑う。

次の変革をもたらすために、そうして二人は人知れず旅していく。

歴史が動き、時代が変わる。